様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３８９５

研究課題名（和文）地域における事業化を支える社会基盤としての「場」とネットワークの研究

研究課題名（英文）Ba and Network in a comunitiy business

研究代表者
露木　恵美子（TSUYUKI, EMIKO）

中央大学・戦略経営研究科・教授

研究者番号：１０４０９５３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域コミュニティにおける事業化について、その事業化を支える基盤としての「場」および人的ネットワークの解明を目的としている。地域コミュニティとしての対象は、駿河湾の桜えび漁業である。資源管理型漁業と言われる「桜えび漁」に関わる漁師と仲買（加工業者）のコミュニティの変化を、六次産業化における場と人的ネットワークの変化として調査（アクションリサーチ）を行った。
「場」とネットワーク理論構築の精緻化については、2018年9月～翌年8月までウィーン大学哲学部の客員教授フェローとして在籍しながら、同大学哲学部副学長のゲオルグ・ステーンガー教授との共同研究を行い成果として『職場の現象学』を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
20世紀につくられた様々なシステムが、時代の変化の中でゆらいでいる。桜えび漁は、1960年代の駿河湾のヘドロ公害に端を発して漁業者主体でつくられた資源管理システム（プール制）を50年にわたり維持してきたが、自然環境・漁業者・市場の変化に適応することができず、大きな転換点を迎えている。このような時代の変化へのシステムの不適応は、日本のあらゆる組織で起こっている共通の課題である。
本研究は、そのようなシステム（組織）の不適応を克服するプロセスを「場」とネットワークの変化として捉え、フィールドワーク（現場に入り込んで一緒に活動する調査）による事例を収集を行い、場の理論の一般化を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to discover the "ba " such as place in English and human network as the foundation of the local community. The main field of the local community is Sakura shrimp fishery in Suruga Bay. I conducted an action research on changes in the community of fishermen and brokers (processors) involved in "cherry shrimp fishing," which is well known as a resource management-type fishery, as changes in ba and human network.
I developed "ba" and network theory based on Phenomenological approach, while enrolled as a visiting professor fellow of the Faculty of Philosophy of the University of Vienna from September 2018 to August of the following year, joint research with Professor Georg Stenger, Vice President of the Faculty of Philosophy of the University of Vienna. As a result, I published "Phenomenology of the Workplace".

研究分野：経営学

キーワード：場　ネットワーク　コミュニティ　六次産業化　組織　フィールドワーク　アクションリサーチ　現象学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 25 年～平成 27 年度まで実施した基盤研究（C）（課題番号：25380477　研究課題名：「地域ネットワーキングと起業プロセスの研究」）を継続的に発展させる研究である。前研究で明らかになったのは、東北の震災や自然環境や市場の変化により、地域内のネットワークが再構築され、第三者の仲介により地域外とのネットワークが広がり、新たに構築された関係（弱い紐帯: Granovetter, 1973）から新しいビジネスの種が生まれる事業化プロセスであった。また、ソーシャル・キャピタルの諸理論（Baker,2000; Burt, 2000; Lin,2001 他）におけるストラクチャルホール（構造的空隙）を埋めるノード（結び目）にあたる人材の行動や志向性によって、新たに生まれたネットワークを維持し発展させる機能が異なり、地域における「場」やネットワークの開放性や拡張性が左右されることも明らかになった。

２．研究の目的

本研究では、個別の起業（事業化）のプロセスにおいて、その事業体（個人や集団）が形成する場の特徴、ならびに、その事業体が活動する地域内外におけるネットワーキング（ネットワークの作り方）とネットワークの構造が、事業化の成功にどのように寄与しているかを解明することを目的とする。そこでの着眼点は以下の３つである。

１．起業（事業化）における場づくりとその場の性質
２．地域内と地域間のネットワーキングとそこから生まれるネットワーク構造
３．ネットワークによる経営資源の獲得と活用

先の課題においては、漁業者の六次産業化の事例を対象に、個別の事業化プロセスにおいて個人や集団が形成する場とネットワークの構造変化を定点観察し、新たなネットワークを通して事業化に必要な経営資源を獲得するまでを研究した。そこで明らかになったのが、事業化のプロセスによって、それぞれの漁業者コミュニティにおいて内部ネットワークの再構築が行われたが、具体的な事業化が進展するのには、それぞれの事業者が危機を乗り越える過程で、第三者からもたらされた異質な外部ネットワークとつながることが必要で、そこから事業化に必要な経営資源を獲得していた。また、それぞれの地域事業者と外部ネットワークをつなぐ媒介者（ノード：結び目）が、ネットワークの構造的空隙を埋める役割をしていた。これらの知見は、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）やネットワーク構造の先行研究において議論されてきたことであり、それら理論的検証となった。一方で、従来の研究においては指摘されてこなかった旧来の内部ネットワークの再構築の契機や、内外をつなぐ媒介者の行動と志向性によって、ネットワークの維持や発展が促進されたり阻害されたりする現象も新たに観察された。すなわち、ネットワークをつなげば社会関係資本となるのではなく、社会関係資本となるネットワークとは何かという問題意識である。媒介者によっては外部とのネットワークを遮断し内部ネットワークを分裂させるような事業化の阻害要因となる可能性（ネットワークの逆機能）もあるということである。さらに、ネットワークの媒介者の性質のみならず、ネットワークを維持するコストを誰がどのように払うのかという問題も浮かび上がった。今回の研究では、従来の研究対象は継続観察しながらも、対象を農業以外の分野や海外のコミュニティにおける事業化に拡げ、より多様な事例により、同様な現象が観察されるかを事例研究によって検証する。

３．研究の方法

本研究の実施については、事例研究と理論研究を平行して行う。事例研究は、二つに分けて考える。一つは、先の研究から継続している漁業における六次産業化（三陸漁業生産組合、由比港漁協青年部等）の活動の定点観測を続けることである。もう一つは、漁業以外の分野や海外の事例を収集し、それらの事業化における共通点を探すことである。海外の事例については、代表研究者が 2018 年～2019 年にオーストリアのウィーン大学に客員教授フェローとして滞在することになったことから、ドイツに本社をもつベーリンガーインゲルハイム社における日本企業の買収における場の構築プロセスについて事例研究を行った。もう一つは、ウィーンに本社をおく老舗のピアノメーカーであるベーゼンドルファー社（日本のヤマハ㈱の完全子会社）を対象に、ウィーンのクラシックミュージックの伝統と街づくり（音楽の街ウィーン）について、参与観察を行った。

「場」の理論の研究については、ウィーン大学の George Stenger 教授および東洋大学名誉教授の山口一郎先生との共同研究を行い、現象学や間文化哲学の諸理論も加えて場の理論の精緻化を進めた。

４．研究成果

（１）地域研究から得られた知見－弱い紐帯の逆機能

ネットワーク理論では、構造的空隙を埋める「個人」の弱い紐帯が、異質なクラスターを結ぶことで新たな知見を相互のクラスターにもたらすことが立証されている。本研究において明らかになったのは、クラスターを媒介する構造的空隙を埋める「個人」は、クラスターをつなげる機能を果たすだけでなく、クラスターを分断する機能も果たすという知見であった。クラスターの結節点にいる個人は、その「個人」の意図により、クラスターをつないだり分断したりする。したがって、結節点にいる個人が何らかの理由で機能しなくなった場合、弱い紐帯の強みは消え

てしまう。このことはネットワークをつなぐ機能が、個人に依存している限りにおいては弱い紐帯の強みを生かしきれないということを示す。構造的空隙を埋める個人は、複数であることが望ましく、また、その個人の強い紐帯におけるポジションがクラスターに対する意味ある情報を普及するためにも重要であることがわかった。つまり、強い紐帯の中心にいる人物がクラスターをつなぐ役割を果たす場合、強い紐帯と弱い紐帯相互の強みを発揮できるが、クラスターをつなぐ人物が、強い紐帯（クラスター）において信頼されていなかったり重要視されていない場合は、クラスターにとって有用な情報でも十分に活用されない。

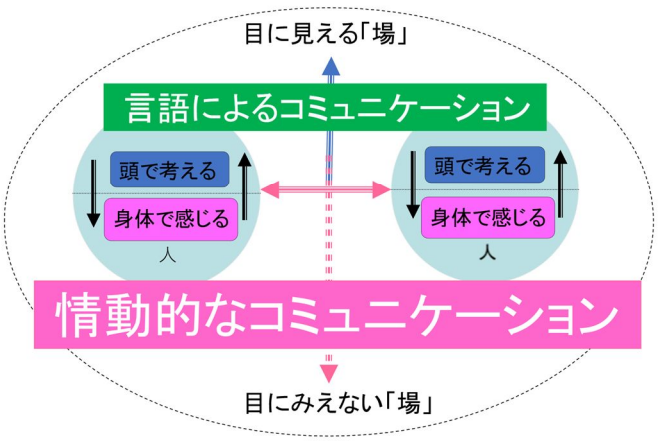
したがって、従来のネットワーク論では、構造的空隙を埋める「個人」がネットワークを媒介する機能のみが注目されていたが、その個人がネットワークを分断する「逆機能」を果たすことが新たな仮説として浮かび上がった。

（２）理論研究から得られた知見

「場」の理論の精緻化については、ウィーン大学の George Stenger 教授および東洋大学名誉教授の山口一郎先生との共同研究によって、現象学の理論を用いて「生活世界における人間関係の一般モデル」（図２）職場におけるコミュニケーションの場のモデル（図１）を構築した。

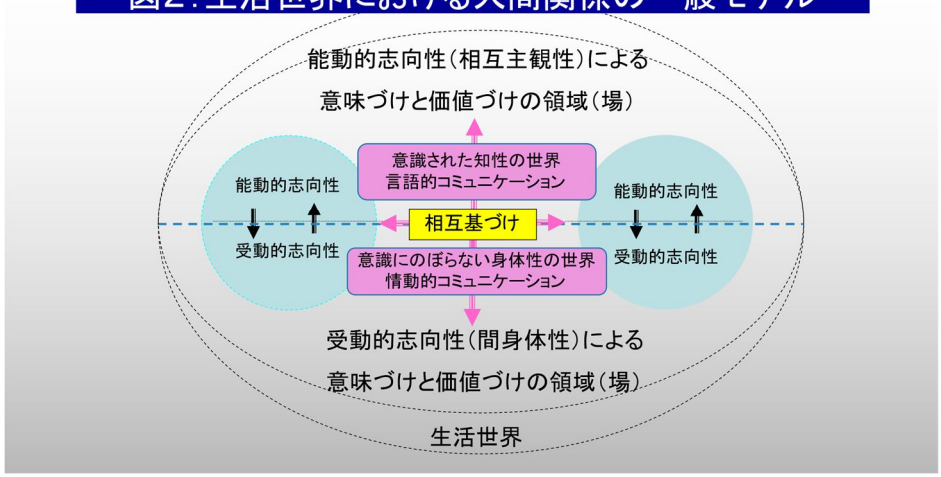
図１の「職場」のコミュニケーションモデルは、能動的綜合の領域（相互主観性）における言語的コミュニケーションの根底に、受動的綜合の領域（間身体性）における非言語的コミュニケーション（情動的コミュニケーション）が常に働いていると同時に、受動的綜合における情動的コミュニケーションは、意図的にコントールすることが困難であることを示した。情動的コミュニケーションは、相互意味づけに大きな影響を与える。これは場における非言語コミュニケーションの重要性を明示的に示唆するものである。非言語のコミュニケーションが重要である点は、経験的に述べられることはあるものの、その重要性の理論的根拠づけは現象学の理論を用いることでしか説明できない。さらに、図２「生活世界における人間関係の一般モデル」では、受動的志向性と能動的志向性の相互作用により、すべての「現象」の意味づけ・価値づけが行われており、これが職場においても基盤として働いていることを理論的に説明した。

図1：職場におけるコミュニケーションモデル



1

図2：生活世界における人間関係の一般モデル



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 露木恵美子	４．巻 Vol.34 No.1
２．論文標題 場と知識創造―現象学的アプローチによる集団的創造性を促す「場」の理論に構築に向けて」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 研究技術計画	６．最初と最後の頁 pp.39-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 露木恵美子	４．巻 58巻5・6号
２．論文標題 場の理論の構築と応用	５．発行年 2017年
３．雑誌名 経済学論纂（中央大学）	６．最初と最後の頁 135-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 露木恵美子	４．巻 65巻1号
２．論文標題 こころみ学園/ココ・ファーム・ワイナリー	５．発行年 2017年
３．雑誌名 一橋ビジネスレビュー	６．最初と最後の頁 120-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 露木恵美子	４．巻 第7号
２．論文標題 組織開発の最前線 - 組織文化変革と場の理論 -	５．発行年 2017年
３．雑誌名 中央大学ビジネスレビュー	６．最初と最後の頁 12-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Emiko Tsuyuki
2．発表標題 Collective Creativity : How People with Intellectual Disabilities Work ?
3．学会等名 ISPIM(The International Society for Professional Innovation Management)（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 EMIKO　TSUYUKI
2．発表標題 Collective Creativity:How People with Intellectual Disabilities Work ?
3．学会等名 ISPIM:the International Society for Professional Innovation Management
4．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 露木恵美子・山口一郎	4．発行年 2020年
2．出版社 白桃書房	5．総ページ数 354
3．書名 職場の現象学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストリア	University of Vienna			